

多読教材としての英語版mangaの可能性

成田圭市（教育学部）

Using English Manga as Material for Extensive Reading Program

NARITA Kei-ichi (Faculty of Education)

This paper critically reviews various English materials for extensive reading and exhaustively discusses their advantages and disadvantages, and then, on the basis of the discussion, argues for the use of English Manga as material for an extensive reading program. Manga is not only attractive and interesting to students, but it also has myriads of advantages as reading material. It is demonstrated that English Manga is very easy for students to read and understand because it originates from their first language's culture and offers visual cues to facilitate the comprehension of the story. It is also claimed that reading Manga gives students an unparalleled opportunity to familiarize themselves with diverse colloquial expressions in English. Thus Manga is shown to be quite suitable for an extensive reading program, where reading for pleasure is the first and foremost priority. In the implementation of an extensive reading program, we must always bear in mind that "In the absence of interesting texts, very little is possible" (Williams, 1986).

Keywords: manga, extensive reading, reading material, reading comprehension, input

1. はじめに

英語学習における多読の効用が喧伝されて久しい。とりわけ、最近の多読ブームのきっかけとなった酒井 (2002) 以来、古川・他 (2005)、金谷 (2005)、酒井・神田 (2005)、デイ & バンフォード (2006) など、学習法としての英語多読を理論と実践の両面から詳細に論じたガイドブックや研究書が日本語で何冊も出版されてきている。いずれの本にもさまざまな多読の効用が説かれているが、Bell (1998) はそれを以下の十項目に簡潔にまとめている。

1. It can provide 'comprehensible input'
2. It can enhance learners' general language competence
3. It increases the students' exposure to the language
4. It can increase knowledge of vocabulary
5. It can lead to improvement in writing
6. It can motivate learners to read
7. It can consolidate previously learned language
8. It helps to build confidence with extended texts
9. It encourages the exploitation of textual redundancy
10. It facilitates the development of prediction skills

日本の英語教育の致命的な欠点の一つは、教室で学

習者が接触する英語の絶対量がきわめて乏しいという点であり、しかも、一步教室の外に出てしまえばほとんど英語を使わずに過ごせるというのが、一般的な英語学習者の置かれた状況である。英語の接触量について言えば、中学校3年間で用いる英語教科書3冊の本文全部がA4用紙数枚に収まるくらいだし、高等学校の英語の教科書もまた同様である。筆者も編集に加わった文科省検定教科書を例にとると、高校1年生用の英語の教科書（「英語 I」）の本文の総語数はせいぜい6000語程度しかなく、英語のペーパーバック版の本に換算すれば20ページ足らずの分量の英語を1年間かけて教室で精読していることになる。かつて隆盛を極めたKrashenのインプット仮説にはさまざまな異論が唱えられており、第二言語習得におけるインプットの役割について一致した明確な了解は現在も得られていないようだが、少なくとも経験的に言えば、中学・高校の6年間にこの程度のインプットしか与えられずに大学に入学してきた学生に、いきなり英字新聞や『タイム』、あるいは英語で書かれた専門的な文献を読ませるのはかなり無理があると思われる。平均的な大学1年生はまだまだ英語学習の初級後期～中級初期の段階にいと考えられるので、彼らにまず必要なのは、十分な量の良質な英語をインプットする機会を持つということになるだろう。

例えば、筆者は数年前に、教育人間科学部1年生向けの教養英語の授業で、当時まだ翻訳の出ていなかったハリー・ポッターシリーズ第3巻と第4巻 (J.K.

Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, *Harry Potter and the Goblet of Fire*) を、前期と後期にそれぞれ一冊ずつ読んでみたことがある。第3巻は435ページ、総語数(token) 約11万語、異なり語数(type) 約5千3百語、第4巻は737ページ、総語数約18万6千語、異なり語数約7千語という長編で、しかも異なり語数の多さからもわかるように学生たちに馴染みのない語彙がかなり含まれているので、1年生向けの教養英語としては随分と無謀な試みであったかもしれない。細部に拘泥せず大まかな話の筋が追えれば良いという方針を学生たちにも周知徹底させ、読んで楽しむことを唯一の目標として掲げたのだが、実際のところ、毎時間30～50ページのノルマをまがりなりにも読了してきたのは、25名ほどの受講生の内のほんの数名であった。毎回プリント数枚に及ぶ詳細な語法・文法・文化的背景に関する注釈と難解語彙の対訳リストをあらかじめ配布したにもかかわらずである(あるいは、そうした余計なお節介がかえって仇になったのかもしれないが)。かろうじて毎週の課題を読了した数名(当然ながら、皆、ハリー・ポッター第1巻と第2巻を翻訳で読んだハリポタファンである)も、まるまる一日がかりでその課題をこなしたと言っていたほどで、読む楽しさをどの程度味わっていたのかは不明である。筆者の思惑としては、学生たちがいったん物語の流れに乗ってしまえば、その面白さに引きずり込まれて先へ先へと読まずにいられないだろうと期待していたわけだが、いかんせん、そもそも日本語での読書習慣もない学生もいるし、しかも、学生たちの多くは500語前後に細切れされた英語の文章は読んだことがあっても、何千語ものまとまった文章を英語で読んだ経験がないため、ノルマの最初の数ページでギブアップしてしまうものがほとんどであった。

この授業の反省が一つのきっかけとなって、授業に英語の多読を取り入れるようになったのであるが、易しい英語で書かれた読み物を楽しみながらおおざっぱに読んで100万語読破しようと主張する酒井(2002)が勧めている、「辞書を引かない、分からなければとばす、つまらない本はすぐ止める」などの具体的な多読の方法に、学生たちは最初は大いに戸惑ったようである。これまでは主に、必ずしも興味を持てるとは限らないお仕着せの教材・テキストに即して精読を旨に辞書を最大限活用して英語学習に励んできたわけだから、これは当然といえば当然の反応であろう。また、一冊の本を読み通すには、英文和訳のようにいちいち英語を日本語に翻訳するのではなく、できる限り英語のままで理解する「直読直解」が求められるが、そうした訓練もほとんど受けたことがないのが学生たちの実情である。さらには、先ほども述べたように、日本語での読書習慣すら身に付けていない学生も少数ながらいるため、日本語だろうと英語だろうと、一冊の本を読み上げるという作業そのものが未知の世界への挑戦と

なるような場合すらある。つまり、読み書き能力は持っているものの、本の読み方というリテラシーが未発達という学生が少なからず存在するのである。

こうした状況で多読を導入する場合、学生たちの興味を喚起し持続させるためには、多読用に用意する教材の選択が非常に重要な鍵となる。Williams (1986)の指摘を俟つまでもなく、"In the absence of interesting texts, very little is possible"なのである。

2. 多読教材の多様性と限界

多読指導に際しては、本をあまり読むことのない学生たちをどのように動機付けて英語の多読へと向かわせるか、そしてその興味をいかにして持続させるかがもっとも重要である。多読授業を何年か続けてきて、学生たちの反応やアンケート結果から導き出せた結論は、結局、そのために一番必要なのは、学生たちが興味を持って読むことができる、読んで面白いと思う本を用意するというに尽きる。つまり、内容から生じる動機付けを最優先させるということである。半期に読むべき冊数やページ数、あるいは読んだ語数を競わせるといった外的動機付けも、学生の学習意欲を維持するのにある程度は必要だが、それだけでは、半ば強制していることにもなり、先ず追求すべき「英語を読む楽しみ」という第一の目的が損なわれてしまいかねないからである。

従来から英語学習のための多読用教材として用いられてきているものは、おおざっぱに以下の二種類に分類できる。

- Graded Readers (段階別読本): 段階的にレベルアップできるように語彙や文法を制限して書き換えられたテキスト
- 児童書: 英米の子どもや若者向けに書かれた絵本や読み物

これらの多読教材については、段階的読本のような易しく書き直された英語が良いのか、それとも児童書のようなオーセンティックな英語を使用すべきなのか、さまざまな議論がなされてきている¹⁾。デイ&バンフォード(2006)は、「平易化神話」と「本物崇拜」というキーワードでこの議論を批判的に検討しているが、詰まるところは、どちらの教材にも一長一短があるのだから、学習者の学習レベルや興味・関心に応じて臨機応変に教材を選択するというのが現実的であろう。高梨・卯城(2000, p.98)も指摘しているように、文学作品などのリトルド版は本物らしさを損なうばかりか冗漫でかえって複雑になる可能性もあるのだが、その一方では、学生のレベルによっては、指導上リトルド版を使う必要性も生じてくるのである。

2.1. 段階別読本

Graded Readersは、Oxford, Cambridge, Longman, Macmillanなどのイギリスの大手語学教材出版社から多数出版されており、古典的文学作品や著名映画の小説版をリトールドしたもの、あるいは、新たに書き起こされたオリジナル作品など、実に多様なテキストが利用できる。しかも、語彙や文法事項の使用に関して非常に周到かつ厳密な段階付けがなされており、学習者のレベルに合わせたための細かい選択が可能になっている。例えばOxford大学出版局の段階別読本シリーズとして良く知られている“Oxford Bookworms”を例にとると、合計230冊以上のタイトルが、Starter (250 headwords), Stage 1 (400 headwords), Stage 2 (700 headwords), Stage 3 (1000 headwords), Stage 4 (1400 headwords), Stage 5 (1800 headwords), Stage 6 (2500 headwords)という7段階にレベル分けされ、またジャンルも、『トム・ソーヤーの冒険』や『ロビンソン・クルーソー』に代表される古典文学作品ばかりでなく、スリラーや探偵小説、SFやファンタジー、ヒューマンインタレストなどのフィクション、さらには実話や地理歴史などのノンフィクションにまで及び、学習者の多様なニーズや興味に柔軟に対応できるラインアップとなっている。

ただし、実際に多読の授業に使用してみると、いろいろと粗も見えてくるものである。学生たちのレベルに相応しくてしかも授業時間内に読みきれる分量のものという基準で選択すると、Oxford BookwormsシリーズならStarter～Stage 3あたりが選択肢となるのだが、その中には、語彙・構文の制約が災いしてかえって冗漫で読みにくい不自然な英語になっているものとか、元の物語を無理やり大幅にはしょって書き換えたためにストーリーが理解しにくくなっているものなど、当たりはずれの差があるのが先ず第一の難点である。つまり、言語面でも内容面でも欠点があるということである。また、英語力がそれほど高くなくしかも読書に慣れていない学生には、できるだけ平易に書かれた短い読み物（16～32ページ程度）からスタートするように指導しているが、そうした読み物（Oxford Bookworms Starter, Penguin Readers Easystarters, Macmillan Readers Starters）の中には、語数が少なすぎるためか、単調な英語が味気なく不自然で、ストーリーとしての面白さがほとんど感じられず、読んで良かったという達成感も得られないような駄作も少なからずある。

もちろん、平易な英語で書かれていながら、読む楽しみを十二分に与えてくれるような良書も数多くある。例えば、Stage 1の“The Coldest Place on Earth”（総語数6300語）は、南極点到達を競ったアムンゼンとスコットとの壮烈な争いを描いたノンフィクションで、読み手をぐいぐいと引きずり込む面白さを持った佳作である。ところが、複数の学生が、ストーリーがゴ

チャゴチャしていてよくわからなかったという感想を漏らしたのには驚いた。確かに、本文中にはノルウェー隊とイギリス隊の記述が交互に出てくるので、その区別をしっかりと見極めないとわかりにくくなるだろうと予想される。この本を選んだ学生にはそうしたアドバイスを与えて読ませているのだが、それでも文脈をきちんと追えないというのは、英語力というよりもむしろ本の読み方の基本的能力に関わる問題であろうか。あるいは、語彙・構文が制限されているために談話標識 (discourse markers) などが適切に使用されず不自然な英語が部分的に生じてしまい、それが理解の妨げとなっているのかもしれない。この点に関しては、今後の実証的研究が必要なところである。

30年以上も前に行われたHoneyfield (1977) の研究の中で、教材の平易化がもたらす弊害として、文の内容が均質化され希薄化されてしまいメリハリのない教材が出来上がってしまう、テキストの結束性 (cohesion) が減少しそれに伴って読み易さも減少してしまう、伝達目的と密接に関わる情報構造を不明瞭にしてしまう、という三点が指摘されている。こうした教材は、自然な英語を理解するには不適切な読書ストラテジーを発達させてしまう危険性があるとさえHoneyfieldは警告しているのである。30年後の現在市販されている段階別読本が、彼の危惧するような平易化をいまだに踏襲しているかどうか、言語学的に検証してみる必要があるだろう。

2.2. 児童書

英米の子供向けに書かれた絵本や児童書、あるいは若者向けの読み物なども、多読用の教材としてよく用いられる。厳密に言えば、この中には、子どもたちの発達段階に合わせて段階付けられたいわゆるLeveled Readersという幼少児童向けのものも含まれる。これは、英米の子どもたちに読み方を指導するために作成された本であり、日本でも良く知られた「がまくんとかえるくん」の原著が収められているHarperCollinsの“I Can Read Books”シリーズや、Oxfordの“Reading Tree”シリーズが代表的なものである。言わば母語話者向けの段階的読本であるが、ここではその区別は問わずに、一括して児童書として扱う。

外国人向けに易しく書き直した英語による段階的読本とは異なり、これらの児童書類はオーセンティックな自然な英語で書かれており、その点で、読解の教材としてきわめて好ましいものと言える。幼い子供向けの本の中には内容が幼稚っぽくて大人が読むのに堪えないものもある反面（ただし、童心に返って無心にそれを楽しむことも可能）、ティーンズ向けの児童書の中には、人生や人間を深く考えさせる中身の濃い作品もあり、また、子供の日常世界を描いた児童書に親しむことは、これから教師あるいは親あるいはその両方になる学生に大きなプラスとなるであろう。語彙・文法

の面で英語学習者向けの気配りがなされていないため、子供向けの絵本であっても難しい語彙や表現が出てくることがあるが、添えられた挿絵が物語の理解に大いに役立ってくれるので、この点でも絵本や挿絵つきの児童書は多読に好適であるといえよう。

デイ&バンフォード(2006, p.72)も、オーセンティックな教材と平易化された教材の長所が結び付いているテキストとして、英米の児童・青少年向けの読み物を推奨している。会話や文章が自然であり、しかも、若年層とのコミュニケーションを目的としたテキストなので、言語と内容の双方において適度に易しいからである。また、Rönqvist & Sell (1994) も、言語面での効用として "Teenage pupils positively like and want to understand these [teenage] books, not least because they give access to the colloquial language used by native-speaker teenagers." と述べ、さらに内容の観点からも "By reading teenage books, young learners can acquire knowledge of the societies, cultures, and sub-cultures depicted in them, to many of which they would otherwise have no immediate access." と述べて、若者向けの読み物の有効性を主張している。

一方、難点として先ず挙げられるのは、オーセンティックな英語であるが故に、英語学習者に対する配慮がなく、馴染みのない語彙や構文が頻出する点である。語彙の面での困難さは、いわゆる日常語彙と分類される語彙が、日本の学生たちが受けてきた英語教育の中で教えられてきた語彙と微妙にずれているために生じる。母語話者の子どもたちなら当然日常的に使っている身近な事物や動作を表す語彙が、我が国の英語教育においては決定的に欠如しているのである。例えば、Osbornの "Magic Tree House"、Sacharの "Marvin Redpost"、Greenburgの "Zack Files"、あるいはRon Royの "A to Z Mysteries"などは、いずれも学生に人気の高いシリーズ形式の児童書で、古川・他(2005)ではOxford Bookworms Stage 1ないしStage 2と同レベルと分類されているが、使用されている語彙に限っていえば、学生の語彙力から見るとかなりレベルの高いものが含まれている。試みにこれらの児童書を私の所属する英語科の学生たちに読ませて、わからなかった単語を抽出させてみたところ、次のような頻度の低い語(『ジーニアス英和辞典』の語彙レベルでいうと、中学・高校学習語や大学生・社会人に必要な語以外のDランクに相当する)がぞろぞろと出てきた(以下の語は、そのうちのほんの一部に過ぎない)。

awning, binocular, blabber, blotch, bonkers, brat, burp, creak, creepy, cursive, dinky, fanny, fishy, gargle, gawk, geek, gimmick, goon, griddle, grouch, heck, hiccup, hurtle, jiffy, jiggle, lanky, lapel, loony, lousy, munch, muss, nook, nutty, ooze, pantry, pee, perky, pharmacy, piranha, plop, plush, saliva, screech, slimy, slob, slurp,

smirk, snoop, spatula, spiffy, spooky, squinty, stomp, swish, swivel, tingly, tomcat, tushy, twitch, urinal, waddle, whimper, whiz, wiggle, wobble, yack, yikes, yuck, yummy, zilch, etc.

もちろん、わからない単語があっても辞書を引かない、わからなければとばす、というのが多読の鉄則であるから、こうした単語はそのまま放っておいても良いし、前後の文脈から何となくその意味が推測できればなお良いであろう。特に頻出する語(例えば, fishy, heck, hurtle, smirk, stomp, swivel, wiggle, wobbleなど)は、何度も遭遇するうちにいつの間にか学生たちの身に付いていったようである。日常表現でよく使われるこういった語彙は、これまでの英語教育の枠組みから漏れていた語彙であり、それらに自然な文脈で触れるというのはきわめて重要なことであろう。

また、語法や文法などの面でも、段階的読本と異なって制限が加えられていないため、かなり上級の事項が出てきたりする。特に厄介なのは、会話に特有の慣用的な口語表現や俗語的表現である。これも挙げると限りがないので一例だけを引用するが、おそらくは前後の文脈や挿絵からこの表現の意味合いを近似値的に推測できる読者もいるはずである。

"Well, you're gonna cry when I give that videotape to the football team!" shouted Mr. Krupp. "I've had it with you two!" (D. Pilkey, *The Adventures of Captain Underpants*, Scholastic, 1997, p.114)

こうした慣用表現やそのほかの文法事項に関しても、上述した単語の場合と同様に、わからなければ取り敢えずはそのままにしてとばすという方策をとるしかなかろう。多読においては100%の理解は初めから要求されていないのであり、物語の大まかな筋道を追えればそれで良いといったテキスト全体の大雑把な理解で満足すべきだからである。

3. 多読教材としてのmanga

3.1. マンガ・リテラシー

実を言うと、筆者はマンガというものをほとんど、というか全く読まない人間であった。確かに子どもの頃に読んでいた記憶はあるが、その後40年以上、マンガとは一切関わりなく生きてきたわけである。そのため、マンガリテラシー—というかマンガ読解力——というか、とにかく、マンガの読み方が全くわからず、最近になって日本語および英語のマンガを久しぶりに読み始めてみて、最初はかなり戸惑ってしまった。マンガの絵と吹き出し内の活字とをどのように整合させて読めばよいのか途方に暮れてしまい、また、活字で与えられるセリフを追うだけでは内容が理解できないこと

に一種のまだるっこさを感じてしまったのである。マンガには独自の様式があり、その「文法」は学習によって習得されるものであるから、マンガ初心者の筆者が戸惑いを感じたのも当然のことである。例えば白石(2003)は、日本のマンガの独自性を次のようにまとめている⁽²⁾。

マンガは世界のコミック一般とは異なり、独特のストーリー性をもつ「視覚的語り (visual narration)」のメディアであると言える。複雑な視覚的語りを可能とするために、マンガは戦後半世紀以上をかけて、さまざまな表現上の約束ごと、いわば独自の視覚的文法や構文を發展させてきた。例えば、マンガはその伸縮自在なコマ割りによって、ストーリーの流れや進行順を示すだけではなく、時間の経過とそのリズム、空間的關係性や心理的展開までも粹取りし誘導する。また背景の図柄の多角的な活用により、キャラクター相互の關係性・内面性を示すことができる。これは、例えば主人公に微笑みかけるボーイフレンドの周りに、いきなりバラの花が咲き乱れるなどの場面を想起してもらえばよいだろう。またマンガ特有の言葉と絵との立体的關係は、キャラクターの表情とはウラハラな言葉が発せられる状況などの複雑な表現を可能としている。他にも擬態語擬声語その他の豊富な記号の数々を駆使したマンガ表現における多層性は、世界のコミックを見回しても例をみない。こうした高度に發展した視覚的語りの技術や文法によって、長編短編のさまざまなストーリーが展開され、キャラクターたちが多彩で複雑な個性を獲得していく。

筆者も、何冊か読み進むうちに次第にこのようなマンガ独自の高度に發展したコーディングにも慣れてきて、徐々にマンガリテラシーを發達させていることを実感しているが、活字だけの書物に比して、いまだに若干の違和感を覚えているのもまた事実である。

ところが、現代の学生の大半はそうではない。白石(2003)はその辺りの事情を総括して以下のように述べている。

この「マンガ・リテラシー」は、言語一般と同様に、若い時に多くのマンガ作品と接することで学習されると考えられる。戦後の日本社会に育った人々の多くは、自分の周りのだれもがマンガを読んでいるという環境にあって、知らない間にマンガ・リテラシーを身につけている。マンガ作品も戦後の日本社会の状況を基盤にして創作されてきた。多くの日本人にとってマンガを読むことは日本語を話すことと同じように「自然」のことに感じられる。それでも我々の周りを見回してみると、戦後のマンガ勃興期にすでに大人であった世代の人々であるとか、な

んらかの理由でマンガ・リテラシーを身につけていない人々、すなわちマンガの楽しみ方を十分に理解していない人々がいることに気がつく。個々人によって、またどのくらいマンガ作品を読み込んだかによって、そのリテラシーの深さや程度も異なる。

ちなみに、学生50名ほどに簡単なアンケートを行ってみたところ、その8割以上が、子どもの頃から現在まで日常的にマンガに親しんでいると回答し、筆者と同じように一切マンガを読まないというのは5名だけであった。従って、学生たちにマンガリテラシーの教育をする必要がないどころか、そのリテラシーをそのまま英語学習に生かせるという好条件を彼らは備えているわけである。実際、学生たちの(日本語の)マンガの読み方を観察すると、あっという間にページを繰って読み進んでいく姿には本当に驚かされる。上の引用で白石が指摘しているマンガ表現の多層性を瞬時に読み取る能力を、英語多読に活用しない手はないのである。特に、マンガ以外の読書習慣が身に付いていない学生の場合にはなおさらである。

余談ながら、マンガリテラシーの基本の一つが、文化により異なっている点に触れておきたい。英語版 manga は、日本のマンガのグローバル化に伴い、主にアメリカ向けに出版されているものであるが、最近出版された manga のほとんどは、英米で出版されている横組みの書籍のように左ページから右ページへと読む仕様ではなく、日本のマンガの組み方を踏襲して右ページから左ページへ読む仕様になっている⁽³⁾。初めて manga を手にしたアメリカ人は、当然、自分たちが普段無意識に行っている横組みの書籍の読み方、つまり、最終ページから読み始めようとするはずである。このため、ほぼ全ての英語版 manga の最終ページには、【図1】～【図3】のような警告がページ全面に大きな文字で印刷されている。

【図1】は Tomoko Ninomiya, "Nodame Cantabile 1" (Del Rey Books, 2005)、【図2】は Takeshi Obata, "Death Note 1" (VIZ Media, 2005)、【図3】は Kaoru Mori, "Emma 1" (CMX, 2006) からコピーしたものである。"TOMARE! [STOP!] You're going the wrong way!", "You're Reading in the Wrong Direction!", "FLIP IT!" といった文言、さらには丁寧に例示されたコマ割りの読み進め方の解説に接して、学生たちも「へーっ」と感嘆することしきりであった。また、マンガの豊かな表現力の源泉の一つである多様な擬態語・擬音語についても、巻末に英語のオノマトペとの対応を一覧表にして載せているものや、Hayao Miyazaki の "My Neighbor TOTORO" (VIZ, 2004) や "Spirited Away" (VIZ, 2002) のように、擬態語・擬音語は絵の一部として日本語のまま残して、巻末にその読み方と意味とを英語で解説してあるものさえある。



You are going the wrong way!

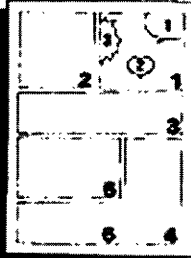
Manga is a completely different type of reading experience.

To start at the beginning, go to the end!

That's right! Authentic manga is read the traditional Japanese way—from right to left. Exactly the opposite of how American books are read. It's easy to follow. Just go to the other end of the book, and read each page—and each panel—from right side to left side, starting at the top right. Now you're experiencing manga as it was meant to be.

【図1】

You're Reading in the Wrong Direction!!




Whoops! Guess what? You're starting at the wrong end of the comic! ...It's true! In keeping with the original Japanese format, Death Note is meant to be read from right to left, starting in the upper right corner.

Unlike English, which is read from left to right, Japanese is read from right to left, meaning that action, sound effects and word-balloon order are completely reversed... something which can make readers unfamiliar with Japanese feel pretty backwards themselves. For this reason, manga or Japanese comics published in the U.S. in English have sometimes been published "flipped"—that is, printed in exact reverse order, as though seen from the other side of a mirror.

By flipping pages, U.S. publishers can avoid confusing readers, but the compromise is not without its downside. For one thing, a character in a flipped manga series who once wore in the original Japanese version a T-shirt emblazoned with "MAY" (as in "the merry month of") now wears one which reads "YAM"! Additionally, many manga creators in Japan are themselves unhappy with the process, as some feel the mirror-imaging of their art alters their original intentions.

We are proud to bring you Tsugumi Ohno & Takashi Okuno's *Death Note* in the original unflipped format. For now, though, turn to the other side of the book and let the quest begin...

-Editor



【図2】

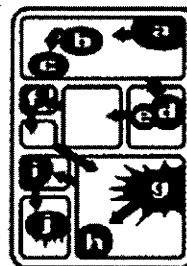
All the pages in this book were designed—and are printed here—in Japanese RIGHT-to-LEFT format. The artwork has been reversed or altered, so you can read the stories the way the creators meant for them to be read.



RIGHT TO LEFT?!

Traditional Japanese manga starts at the upper right-hand corner, and moves right-to-left as it goes down the page. Follow this guide for an easy understanding.

For more information and sneak peeks, visit www.manga.com. Call 1-800-COMICS-BOOK for the nearest comic book store based to your local neighborhood.



【図3】

3.2. 多読教材としての「翻訳もの」

教材としてのマンガは、実は、上で紹介した段階的読本の中にも採用されている。Oxford BookwormsのStarterレベルには、コミックスタイルの本が十冊ほど含まれているのである。ただ、基本250語に制限された初級レベルのマンガなので、英語表現が単調で内容もあまり面白いともいえず、筆者も取り立てて学生たちにこれを勧めることはしなかった。また、英語の母語話者向けに書かれたコミック（いわゆる「アメコミ」）も多読用に何冊か用意してみたが、扱っている題材が我々に馴染みのない世界だったり、過度に暴力的なものだったり、しかも英語表現も難しく、積極的に多読授業にしようと思わせるようなものではなかった。デイ&バンフォード(2006)も、「コミック本の見かけ上の簡潔さは当てにならない」と述べ、初級レベルでコミックを使うなら子供向けのもの（例えば、Mickey MouseやDonald Duck）が無難であると論じている。

それが何故、最近になって多読授業に英語版のmangaを導入するようになったかということ、一つには、日本の優れたマンガが多数英語に翻訳されていることをつい最近になって知ったからであるが、もう一つのきっかけは、学生の興味・関心を喚起し、かつ彼らの鑑賞に堪えうるような多読用の優れた教材を渉猟しているうちに、日本の文学作品や童話、昔話や落語などの英語版を集めるようになり、もともと日本語で書か

れた読み物の英語翻訳版を読むことのさまざまな利点に気付いたからである。

具体的には、講談社インターナショナルが出版している英語文庫や対訳本、IBCパブリッシングが出版している洋販ラダー・シリーズなどに収められた英訳版の日本文学や童話である。特に、段階別読本であるラダー・シリーズの初級・中級レベルで出ている『ごんぎつね』『手袋を買いに』『鼻』『薮の中』『杜子春』『走れメロス』『セロ弾きのゴーシュ』『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』『よだかの星』『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『落語』『怪談』といった名作の英訳版は、自然で平易な英語で書かれているために非常に読み易く、しかも、元の作品の面白さや感動を上手に伝えていて、非常に秀逸である。段階的読本には当たりはずれの差が大きいと上で述べたが、このラダー・シリーズに関する限り、今のところ学生たちの評価は好意的なものが多く、授業でもよく読まれている。

こうした「翻訳もの」(読者の母語から第二言語へと翻訳された読み物)は、読者がその物語を理解するのに必要な背景や文化などの知識を持っているので比較的容易に理解できるし、また、そのオリジナルを読んだことがあれば、登場人物・話の筋書き・語彙などについての知識が利用できるという利点もあり、多読教材として優れているとデイ & パンフォード (2006, p.132) も推奨している。確かに、自分が属する文化とは異なる文化を背景とした物語を理解するのは、時として非常な困難を伴うものであり、このことが、多読に外国文学や外国の物語を使う際に大きな障害となりうる。また、全く知らない読み物を読むよりも、母語で読んだことのある読み物を読む方が、心理的な負担や不安が軽くなるので、この点でも、自国作品の翻訳ものが取り組みやすく理解しやすいのは当然である。Gray (2005)も同様の利点を指摘した上で、さらに、第二言語習得の観点からも、もともと読者の母語で書かれた作品の翻訳を教材に使うことで、第二言語の理解や保持が大いに高められると述べている。

3.3. mangaのメリットとデメリット

多読教材としてmangaを使うことの利点を事細かに論じる必要はほとんどなかろう。多読教材がまず備えるべき条件は、とにかくにも内容の面白さに尽きるからであり、その条件をmangaは100%クリアしているからである。学生たちが楽しんで読めるという点で、他のどんな教材も太刀打ちできないだろう。しかも、3.1節で述べたように、学生たちのほとんどはマンガ・リテラシーを身に付けており、その能力を最大限に活用して英語の読書に臨むことができるのである。ただ、単なる面白さ以外にも、教材としてのmanga特有のメリットがあるので、以下ではそうした利点を欠点とともに考察してみよう。

英語版のmangaは、もともと日本語で書かれた作品

を英語に翻訳したものであるから、上で述べた「翻訳もの」の一種と位置づけることができる。従って、多読教材としてのmangaは、上述した翻訳ものの利点をすべて有することになる。もともと日本人が日本人の娯楽のために描いたものなのだから、どのようなジャンルであっても、文化、舞台設定、生活習慣、登場人物の性格・言動など、いずれの面でも、我々に極めて馴染みやすいのは言うまでもない。それが内容の理解に大きく貢献するわけである。もちろん、mangaの中には、19世紀ヴィクトリア朝英国を舞台にした"Emma"のような作品や、異次元・異空間を舞台にしたSF・ファンタジー作品、あるいは歴史ものなど、「異文化」を背景とした作品もあるが、日本人が描いたものであるが故に、登場人物の性格や言動、あるいはストーリー展開などの面に日本人ならではの好みやメンタリティが色濃く反映しており、決して理解の妨げとはならないと思われる。

また、mangaは絵本としての性格を本質的に内包する読み物であるから、絵本の利点も有していることになる。極端に言えば、挿絵だけでも楽しめてしまうのがmangaの特質であり、絵だけを眺めて終わってしまうという危険性も孕んでいるが、その一方、絵が内容理解に必要な文脈情報を十分に与えてくれるので、言語的に難しい部分の理解が大いに助けられるという点が重要である。初級レベルの学習者の場合、挿絵とセリフの理解できる部分だけでも十分にストーリーを追って楽しむことができるし、中・上級レベルの学習者も、会話にしばしば用いられる慣用的口語表現や俗語などには慣れていないことがあるが、絵によって与えられるさまざまな文脈情報を手がかりにその意味を推測することができるのである。会話体、とくに慣用表現や俗語表現が多いのは、上で紹介した児童書などにも見られる特徴だが、活字が主体の児童書の場合、地の文で与えられる文脈情報を的確に読み込むことができないと、活字だけの会話の連続を理解するのはかなり難しくなる。ところが、絵が主体となっているmangaでは、地の文に相当する部分が挿絵で表現されているので、会話の参与者や状況、さらには参与者の表情なども一目瞭然であり、その結果、セリフの意図がごく自然な形で了解されるのである。

言語面では、mangaは基本的に会話体の表現だけでストーリーが進行していくために、短いセリフが連続する形式となる。これは、口語表現の学習のための非常に貴重な教材となる。活字だけで記された読み物の場合、たとえ会話が含まれていても、基本は地の文の書き言葉が読みの対象となるが、そこに現れる文の大半は、複雑な構造を持った文であり、通常の会話表現とは大きく異なっている。ところがmangaの吹き出しに記されたセリフは、ごく単純な単文あるいは短いチャンクをポンポンと連続的に繰り出すことで成り立っている。これはまさに自然な会話そのものであり、

manga以外の読み物では接することのできない類の英語である。一例として、少し長くなるが、"Death Note 1" (VIZ Media, 2005) の冒頭部、帰宅した主人公Lightの部屋に初めて死神Ryukが訪れる場面のセリフを見てみよう。

L(ight): I'm home.

M(other): Light, is that you?

L: Oh, yeah. Here.

M: Oh, my! You placed first again – and these practice college entrance exams are nationwide!

L: Uh-hum. Well, I'll be studying so don't bother me, okay?

M: Okay, dear. Oh, Light. Is there anything you've been wanting? Anything at all – just let me know.

L: No, Mom.

[Ryuk suddenly appears in Light's room]

R(yuk): You seem to like it.

L: AAARGH ...!

R: Why're you so surprised to see me? I'm Ryuk, the Shinigami who dropped that notebook. The way you were acting just now, I can tell you know it isn't just any old notebook ... right?

L: A ... Shinigami? I'm not surprised to see you, Ryuk. ... In fact, I've been waiting for you ...

R: Really.

L: Gee, a personal visit from a Shinigami ... very kind of you ... Not that I doubted this was a "Death God's Notebook," but ... seeing things with my own eyes like this lets me act with greater certainty. Plus, there're some things I wanted to ask you ...

R: Hee hee ... Wow, this is amazing. Gotta say, I'm the one who's surprised. I've heard of Death Notes getting down to the human world a few times before ... But no one's ever done this many in just five days. Most people would be too scared.

L: I'm ready for anything, Ryuk ... I used the notebook, knowing it belonged to a Shinigami ... and now the Shinigami's here ... What happens to me now ...? You take my soul or something?

R: Huh? What's that? Some fantasy you humans came up with? I'm not going to do anything to you. The moment a Death Note lands in the human world, it belongs to the human world. So it's yours now.

L: Mine ...

R: You don't want it, give it to another human. When you do, I'll just have to erase all your Death Note memories.

このような生きた会話表現に接することにより、口語表現のインプットが蓄積されていくことも、多読教

材としてmangaを用いることの大きな利点といえよう。

さらにもう一つ、mangaを用いることのメリットとして、特に初級レベルの学習者の場合、元の日本語のマンガと突き合わせて併行して読み進むという学習法も考えられる。mangaによっては、最初から対訳形式で出版されているものもあり、講談社インターナショナルからは、「サザエさん」「いじわるばあさん」「OL進化論」「コボちゃん」などの四コママンガや、「金田一少年の事件簿」「GTO」「島耕作」「のだめカンタービレ」「ラブひな」といった長編ものが、バイリンガル版という名称で販売されている。これらも筆者の多読授業で使っているのだが、果たして対訳版が多読教材として有効なのかどうかについては、実証的な研究を待ちたい。最初から日本語の訳にばかり目が行ってしまつては、多読の効果は全く上がらないし、「英語モード」と「日本語モード」を切り替えて読み進むよりも、英語モードだけで理解していく方が学習効果が大きいのではないかと考えられるからである。ただ、最近の第二言語習得理論の説くところによれば、学習者の注意が目標言語の語彙・文法・音などの項目に向かいそれを意識することが、言語発達を促進する上で効果的だということである。つまり、「学習者が語彙や文法などの言語形式につまずいた時が、言語能力を伸ばすもっとも重要な瞬間である」(村野井, 2004) という考え方である。これに従えば、対訳版mangaは、学習者のつまずきに適切な支援を与えてくれる格好の教材とも言えよう。いずれにせよ、あまり多読に慣れていない学生の場合、対訳が心理的な不安を取り除いてくれるので、対訳版も一つの選択肢として残しておくべきであろう。

英語の分量の点でも、mangaには大きなメリットがある。一冊のmangaは大体200ページ前後であるが、総語数は一冊あたり5000語から10000語くらいで、平均すると6500語程度になる⁴⁾。セリフの少ない"My Neighbor TOTORO"だと全4巻の合計でも4000語程度である。段階別読本の初級から中級レベルの本が、平均して40~60ページで総語数が5000語から8000語程度、代表的な児童書シリーズとして上で紹介したMagic Tree House、Marvin Redpost、Zack Files、A to Z Mysteriesなどが、60~100ページで総語数が5000語から9000語程度であるが、manga一冊が大体これらに匹敵する分量であり、授業時間内に読むのにぴったりの適切な語彙数なのである。本を読む速度には個人差があるが、こうした平易な英語を読む際には、最低でも100 wpm、望むらくは150~200 wpmくらいの速度が求められる。manga一冊が6500語程度なら、100 wpm以下のゆっくりした速度であっても、90分の授業時間内に十分読了できる分量なのである。

一方、公平を期す意味で、mangaの難点も挙げておこう。まず大きな難点は、多くのmangaが全て大文字で書かれているという点である。ほぼ全ての学生が、

まずこの点で面食らうようである。これがせつかくの manga を非常に読みにくくしているのは残念な事実であるが、何冊か読んでいくうちに慣れてきてあまり気にならなくなるものである。幸いなことに、読みやすさを考慮して小文字も使っている manga も最近が増えてきているようである（例えば"Nodame Cantabile"）。

もう一点は、上でも触れたことだが、学生たちにあまり馴染みのない会話特有の口語慣用表現や俗語表現がしばしば出てくることである。こうした表現に頻繁に触れるのは一面では利点でもあるのだが、そこに理解が伴わなければ単に多読の障害にしかならないし、言語インプットとしてもあまり役立たないの言うまでもない。2.2節で一例を挙げたが、もう一つだけ具体例を見てみよう。"Emma 1"(CMX, 2006)の冒頭で主人公のWilliamが久しぶりにかつての家庭教師Kelly Stonerを訪問する場面である。

S(toner): Emma? What's the matter?

W(illiam): It's been a long time, Madam. It's me, William Jones.

S: ... Well, I'll be. Yes, it certainly has been a long time. You've gotten a lot bigger. But that's peculiar ... I seem to recall you as having a slightly more handsome face.

W: Um, I believe that's due to just before ...

これを数名の英語科の学生に読ませてみたが、誰一人として "Well, I'll be." が驚きを示す慣用表現であると理解したものはいなかった。言語使用の「場面」や「機能」を重視した新しいカリキュラムで英語教育を受けてきたとはいえ、「驚き」を表す表現として "Well, I'll be." まではさすがに普通は習わないだろう⁶⁾。もちろん、2.2節で述べたように、この部分がわからなければ取り敢えずはそのままにしてとばして読み進めてよい。多読においては100%の理解は初めから要求されていないのであり、物語の大まかな筋道を追えればそれでよしといったテキスト全体の大雑把な理解で満足すべきだからである。

4. まとめ

本論では、さまざまな多読教材を批判的に検討し、その中でも英語版の manga が、多読用の教材としてきわめて有望な可能性を持っていることを論証した。セリフに含まれる語彙や口語表現、あるいは文法事項などの観点から manga を言語学的に分析することにより、語学教材としての manga の適格性をさらに詳細に検証する作業が残されているが、これは今後の課題とした。

多読の授業は数年前から継続的に実行しているものの、manga をその授業に導入したのはつい最近のこと

であるため、manga を学生たちに読ませたのはまだ三回ほどに過ぎないが、最初に教室で "Death Note" や "Nodame Cantabile"、あるいは "TOTORO" といった manga を紹介したときに学生たちが示した反応は非常にドラマティックなものであった。教室で一心不乱に manga を読み進める学生たちの姿や、読み終わって本を返却する際の表情に、それまでの授業時とは異なった熱意や満足感が感じられたのは、単に筆者の気のせいであろうか。⁶⁾

注

1. 「オーセンティックな英語」という概念については Lee (1995) の議論が参考になる。
2. 現在では、マンガの英訳版は英語でも "Manga" と呼ばれ、表紙にもそう表示してあるのが普通であるが、"Manga" という語が英語圏で一般的になるまでは、日本のマンガは "Comic" ではなく "Graphic Novel" と表示されていたという事実は非常に示唆的である。
3. かなり以前に翻訳出版された manga の場合には、一般の英米の書籍のように左ページから右ページへ読む仕様に組みかえられているものも散見する。
4. 以下に挙げる語数データは古川・他(2005)に基づいている。
5. 調べたかぎりでは、英和辞典でこれをきちんと解説しているのは『リーダーズ英和辞典』（研究社）だけであった。"damn" の項に、「(Well,) I'll be [I'm] damned. 《口》へーっ、驚いたなあ、ええっ《強い驚き・いらだちを示す; damned は略されることもある》」という記述がある。
6. なお、本稿脱稿後に出版された古川・宮下(2008)においても、多読教材としての Manga が紹介されている。

参考文献

- Bell, T. (1998) Extensive Reading: Why? and How? The Internet TESL Journal, IV/12.
- Clarity, M. (2007) An Extensive Reading Program for Your ESL Classroom. The Internet TESL Journal, XIII/8.
- Davis, C. (1995) Extensive Reading: an Expensive Extravagance? ELT Journal, 49/4, 329-336.
- リチャード・デイ&ジュリアン・バンフォード（榊井幹生監訳）(2006) 多読で学ぶ英語. 松柏社.
- 古川昭夫・他 (2005) 英語多読完全ブックガイド. コスモピア.
- 古川昭夫・宮下いづみ(2008) Mangaで楽しく英語を学ぶ. 小学館.

- Gray, R. (2005) Using Translated First Language Literature in the Second Language Classroom. The Internet TESL Journal, XI/12.
- Honeyfield, J. (1977) Simplification. TESOL Quarterly, 11/4, 431-440.
- 金谷憲 (2005) 忙しい人の多読トレーニング・メニュー. IBCパブリッシング.
- Lee, W.Y. (1995) Authenticity Revisited: Text Authenticity and Learner Authenticity. ELT Journal, 49/4, 323-328.
- 村野井仁 (2004) 第二言語習得研究から見た多読指導. 英語教育 2 月号, 30-31.
- 成田圭市 (2005) 英語読書の薦め. 新潟大学生協書評誌 ほんのこべや28号, 26-31.
- Rönnqvist, L. & Roger D. Sell (1994) Teenage Books for Teenagers: Reflections on Literature in Language Education. ELT Journal, 48/2, 125-132.
- 酒井邦秀 (2002) 快読100万語! ペーパーバックへの道. ちくま学芸文庫.
- 酒井邦秀・神田みなみ (2005) 教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ. 大修館書店.
- Schodt, F. L. (1983) Manga! Manga! The World of Japanese Comics. Kodansha International.
- 白石さや (2003) マンガ・メディアのグローバル化. 情報メディア研究資料センターニュース15号. 東京大学社会情報研究所.
- 高梨庸雄・卯城祐司 (2000) 英語リーディング事典. 研究社.
- Williams, R. (1986) "Top Ten" Principles for Teaching Reading. ELT Journal, 40/1, 42-45.